＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

北海道大学総合博物館

ボランティア・ニュース

No. 25

2012. 6

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

会報

第10回ボランティアの会総会，講演会および懇親会の報告

会長　在田一則

第10回ボランティアの会総会・講演会が2012年５月18日(金)16時から総合博物館3階N308教室、また懇親会がボランティア控室（N302）で行われました。以下に簡単に報告いたします。

1. **総会**（16:00～16:40）

総会は19名が出席して行われました。会長挨拶の後， 2011年度活動報告案および2012年度活動計画案の提案があり，承認されました。

2011年度の主な活動として以下がありました。

＊談話会（3回）

第21回　8月19日：

（青山慎一氏：国蝶オオムラサキ選定論争始末記）

第22回　10月7日：

（夢明塾のそば打ちとロス・ヤチシンコスのインカ民俗音楽演奏）

第 23 回　2012 年 1 月 27 日：

（ボランティアチェンバログループ：バロックトランペットとチェンバロの夕べ、および新年会）

総会風景

＊博物館におしかけよう会（4 回）

第5回　6月4日：（三岸好太郎美術館）、 第6回　９月１１日：（円山動物園園）、第7回　11月5日：（北海道文学館）、第8回　2月18日：（弥永北海道博物館）

＊ボランティア・ニュース発行（4回）

第21号（6月1日）、第22号（9月1日）、第23号（12月1日）、第24号（3月1日）

＊その他

ボランティアグループ連絡会を原則として毎月第1・3金曜日の午後1時から30分～60分程度で「ボランティア控室（N302）で開催しました。また、恒例の総合博物館前庭掃除を5月8日に7名が参加して行いました。

＊2012年度活動

これまで通りの活動を地道に積み重ねますが，談話会でお話を聞きたい講師，博物館におしかけよう会の訪問先などの希望をお知らせいただければ，事務局でアレンジいたします。

＊2012年度の体制

会長、グループ連絡会およびボランティア・ニュース編集委員会は以下のように留任となりました。在田一則（会長）・星野フサ（植物）・宮本昌子（昆虫）、寺西辰郎（地学）・石川満寿夫（北大の歴史・平成遠友夜学校）・塚田則生（展示解説）・新妻美紀（チェンバロ）・沼田勇美（図書室業務）（以上はグループ連絡会メンバー）、石川満寿夫・永山 修・沼田勇美・星野フサ・安田 正（以上はボランティアニュース編集委員会）。

2. 講演会（16:45～18:15）

講師：久末進一氏（北大総合博物館図書ボランティア）

演題：ペリーより早く北海道にやってきた大英帝国探検船

幕末期の蝦夷周辺における北方航路を探る国際情勢、その状況下でペリー浦賀来航より前に（1796年）突如室蘭沖に姿を現した英国戦艦プロビデンス、噴火湾を“発見”した艦長ブロ―トン中佐、そしてブロ―トンとの折衝・通訳にあたった松前藩藩医加藤肩吾とブロートンとの国禁の地図交換を含む交流などを話していただき、その後室蘭市民による自主制作ドキュメント映画（北の秘史発掘 室蘭の夜明け）を楽しみました。

3. 懇親会（18:20～20:10）

ボランティア控室（N302）で、久末さんほか15名が楽しく歓談しました。

****

特別寄稿　“中谷宇吉郎小伝”②

名古屋大学名誉教授　樋口敬二

寅彦と宇吉郎

ー寺田寅彦記念館と高知県立文学館

『科学朝日』1995 年 10 月号：「特集・寺田寅彦ー時代を超越する、その精神、その科学」で、私は「今に生きる魅力：孫弟子にとっての寅彦」を寄せ、寅彦の世界を「自然を考える心のふるさと」と書いた。というのは、中学時代に中谷先生の「「茶碗の湯」のことなど」（岩波文庫『中谷宇吉郎随筆集』所収）を読み、三高時代には『雪』（岩波新書）をセミナーのように輪読したりして、寺田、中谷の著作の影響によって研究の道に入り、中谷門下の一人になったからである。そのため、1996 年 12 月から刊行を開始した『寺田寅彦全集』（岩波書店）の編集は私と太田文平氏が担当することになった。

そこで、1996 年 11 月に高知市で開催された日本雪氷学会関西以西支部の雪氷フオーラム「寺田寅彦と中谷宇吉郎」では「寅彦・宇吉郎・地球・極地」という講演をした。その機会に「正三位・勲二等寺田寅彦之墓」と書かれたお墓に参り、寺田寅彦記念館を参観したが、記念館は復元された寺田邸であり、寅彦による英語論文の手書き原稿、夫人を描いたスケッチブックなど、貴重な遺品を拝見することができた。そこに展示されている寅彦先生の油絵の自画像と並んで写真を撮ったのも懐かしい思い出である。

記念館には「寺田寅彦記念館 友の会」（事務局：〒780-0915 高知市小津町 4―5 同記念館内、電話 088-873-0564）があり、寅彦研究『槲（かしわ）』を刊行している、なお前回に書かなかったが、同じように中谷宇吉郎 雪の科学館にも「中谷宇吉郎 雪の科学館 友の会」（事務局：科学館内）があり、機関誌『六花』を刊行しているが、第 22 号（2005 年 12 月）に会員の有志が寺田寅彦記念館を訪れた記事が載っている。

私が記念館を参観したのは 1996 年で、翌 1997 年 11 月 16 には再び高知市を訪れ、高知県立文学館の開館記念特別講演会で「寅彦と地球物理学」という講演をし、その記録は『流風余韻 第一集』(高知県立文学館、1998)に収録されている。この文学館には寺田寅彦記念室があり、夏目漱石宛の書簡、絵はがき、自筆原稿など遺品の展示がある。

寺田寅彦については、ごく最近にも池内 了・責任編集『寺田寅彦ーいまを照らす科学者のことば』(河出書房新社、2011 年 11 月 30 日発行)、小山慶太著『寺田寅彦ー漱石、レイリー卿と和魂洋才の物理学』(中公新書、2012年1月25日発行)が刊行されているように、現在も魅力を維持している。前者には思い出として宇吉郎の「指導者としての先生」が収録されており、そこには「「ねえ君、不思議だと思ひませんか」と当時まだ学生であった自分に話された事がある。此の様な一言が今でも生き生きと自分の頭に深い印象を残して居る。そして自然現象の不思議には自分自身の眼で驚異しなければならぬと言ふ先生の訓へを肉付けて居てくれるのである。」と書かれ、宇吉郎の科学の原点に寅彦の存在があることを示している。

そこで寺田ー中谷を結ぶ流れをどう捉えるかについては様々な考え方があり得るが、私は『科学』(1996 年 10 月号)の「特集:寺田寅彦と現代」で、「問題解決型研究」という視点を挙げた。その詳細は、岩波講座『科学/技術と人間』2『専門家集団の思考と行動』の樋口敬二「行動的研究集団の系譜」を参照していただきたいが、寺田による問題解決型研究の典型は、1924 年、海軍(霞ヶ浦航空隊)の SS3 号飛行船が茨城県取手市付近(現在、遭難碑がある)の上空で原因不明の爆発事故を起こして墜落した事件を実験的に解明した研究と考えられる。

その時の寺田の取り組み方を、中谷は、「寺田先生の追憶ー大學卒業前後の想い出」の中で、「先生の科学者としての頭と眼、芸術家としての勘、愛国の至情などが渾然として一体となり、このどうにも手のつけようのない難問を数か月のうちに見事に解決されたのであった。」と書いているが、大学卒業間もなくの頃にこの研究に参加して感銘を受けた中谷は、後に雪の研究をはじめとして、北海道という寒冷地域の生活、社会に大きな影響を与える風土について、雪、凍土、霧、着氷、洪水、水資源など、多方面にわたる問題解決型研究を展開した、というのが私の見方である。

ところで、寺田の長男・寺田東一は、1932 年から 5 年間、中谷の助手として北大に勤務し、『中谷宇吉郎雪の物語』(中谷宇吉郎 雪の科学館、1994)に「中谷先生と父寅彦」を寄せ、北大在籍中の 1932 年の秋に寺田が北大で臨時講義をした時の思い出を述べている。その時に中谷の案内で、月寒の種羊場を訪れた際に中谷が撮った写真が『雪の物語』(p. 59)と『科学朝日』1995 年 10 月号の「特集・寺田寅彦」に出ており、そこには、寺田とともに当時北大の同僚であった親友・茅 誠司が写っている。

月寒種羊場(現在の羊が丘)での寺田寅彦(右)と
茅 誠司(中央)、池田芳郎(左) ー中谷宇吉郎撮影ー

また、『中谷宇吉郎 雪の物語』には、私の「のこされたネクタイー中谷先生の思い出」(『図書』1974 年 4 月)が載っているが、私と寺田先生を結ぶエピソードなので、紹介しておきたい。それは、1955 年 4 月 9 日、北大・物理学科の大学院 3 年の課程をおえたばかりの私が東京で開催された物理学会に出席し、原宿の先生のお宅を訪ねた際のことである。この夜、お宅には小宮豊隆、小林秀雄、武見太郎といった方々が集まられた小宴があり、私も末席を汚し、宴がお開きになった後も応接間で先生のお相手をしていると、次のような出来事が起こった。

応接間を出ていった三代子さんは、両手いっぱいに

ネクタイを持ってもどってきて、先生は、その中から一本のネクタイをとりあげた。粗い網目織り、中ほどがやや細くなっているほかは、幅がほぼ一様な茶色いネクタイである。

「これはねえ、寺田先生が生前好きでしめてらしたネクタイで、亡くなってから奥さんが形見に下さったものだ。先生はおしゃれだったから、英国製だよ。これを君にあげよう。」そういわれて、私はびっくりした。「いやあ、いただいても、もったいなくて、しめられません。」と、お断りすると、「なにしまっておいて、次の世代に渡せば、いいんだ。うちに置いておくと、娘たちが粗末にしてもいけないし、それに、僕も、そろそろ保管の責任を解消したくなった。」そういわれて、頂戴することにする。

こうして、私は寺田先生のネクタイを持つようになった。ただ、私が持っているのでは、そんな由緒のあるネクタイだとは信じてもらえないのではないかという点が、気がかりであった。しかし、それを解決する機会は、6年後、1961年の冬にやってきた。理学博士の学位を授けられたお礼の食事を当時札幌の大学村に住んでいた私の自宅で差し上げた際に、食後に心地よげに酔われたので、私はこの時と思って、年来の希望を切り出した。

「先生、ずっと以前に、先生から寺田先生のネクタイをいただきました。しかし、私が持っていては、信用されないと困るんで、証明書のようなものを書いていただけないでしょうか」。と、先生は、一瞬びっくりしたような顔をされて、「なんだ、あのネクタイは、君のところにあったのか」と、私をがっかりさせるようなことをおっしゃる。

「先生、そんな・・・」あとは、大笑いになって、「よしよし、書いてやるよ」と受け合われて、「しかし、やっぱり箱にいれないとねえ！」と注文をつけられた。翌朝、私は三越にいって、ネクタイ用の桐の箱を買い、それに寺田先生のネクタイをおさめて、北大理学部の先生の部屋へ持っていった。

翌日、よばれて、先生の部屋にゆくと、箱書きのすんだ桐箱を渡された。箱の上書きには、「寅彦襟飾」とあり、蓋の裏には、「寅彦没後、寅彦夫人より紀念として　先生遺愛の襟飾を贈らる　以て樋口敬二君に呈す　　宇吉郎[印]」と書かれていた。

亡くなるほぼ1年前のことで、その後長年にわたって大切に所持していたが、30年を経て1994年に中谷宇吉郎　雪の科学館が開館したのを機会に寄託し、「次の世代に渡せば、いいんだ」という先生のお言葉どおり、寅彦ネクタイは「寅彦襟飾」という上書きのある桐箱とともに展示されて、科学館を訪れる多くの人達に語りかけている。

上の文が『中谷宇吉郎　雪の物語』に再録された翌年、コピーを司馬遼太郎さんにお送りした処、1995年12月11日付けのお返事のハガキが来て、「お手紙、御旧稿を拝読し、禅でいう印可が、寅彦、宇吉郎から敬二博士に相伝されていることを知って、はなはだ愉快でありました。小生のように外から漠然とみて、あの三人は、一脈のつよい糸でつながっているな、と思っていたのですが、ネクタイが相伝されていることを知って小生の微笑がひろがりました。」という一節があり、嬉しい思い出となっている。

****

活動報告　ボランティア・ニュース創刊号を発行した頃

－25号発行の節目を迎えて－

植物・図書ボランテイア　星野フサ

多くの人々に支えられて古稀を迎えました。その中で一番印象に残っているのが北大総合博物館に研究生として門をくぐった10年前です。私を高橋英樹先生は快く受け入れてくださいました。当時まだ大学は独立行政法人になる前でホノボノしていました。

研究生にさせていただいて間もなく大学時代から

知り合いの地学専攻箕浦先生から社会人が協力するボランティアの会の設立について申し出がありました。ボランティアの会事務局は2002年12月に中野系（化石ボランティア）、笠原明子（考古ボランティア）、星野フサ（植物ボランティア）の事務局員、それにグループ責任者を植物標本学生、植物標本一般（I）、植物標本一般（II）、地学、植物リスト、考古、展示解説、化石、昆虫の各グループから出してもらってスタートしました。ボランテイアの会会長は久万田敏夫先生が引き受けてくださいました。当時、北大学生中心のボランテイアは 4 月には多数登録されていても夏休みが終わると姿が見えなくなるという噂をきいていました。社会人の展示解説ボランテイアの方もおられましたが身の回りの物を置く机もなく私に用意された机に保管してあげたこともありました。ボランテイア室があったほうがよいということで空き部屋を見て回ったこともありました。

3階小林快次先生の近くにボランテイア室が設置された時もありました。松枝大治先生の取り計らいで現在のアインシュタインドームに面した N302 が用意され、本棚や冷蔵庫が整えられとても嬉しかったことがつい昨日のように思い出されます（ボランテイア・ニュース創刊号 p.2 ）。まもなく学生さんの就職戦線の厳しい時代となり社会人が継続してボランテイアを続けていただくのが良いのではと久万田先生も発言されるようになりました。

こうして博物館ボランテイアの会が発足し、2003 年2月21日制定の規約が作られました（2009年5月29日改正）。このころ沼田勇美さんは藤田館長にボランティア・ニュースを発行してみては・・・、と相談し許可をいただいたので私とパソコンが得意な望月さんが加わり三人体制で編集員会が発足しました。こうしてボランティア・ニュース創刊号が2005年2月に発刊されました。ボランティアの皆さんの心のつながりがこのニュースを介して発展するよう願って原稿の投稿をお願いしてまいりました。

私が関わる前にはボランティアは北大生が中心で、彼らの展示解説の活動の一端は塚本精蔵さんにより述べられています（ボランティア・ニュース第7号、p. 3）。久万田会長体制は2006年5月まででこの時の総会で在田会長体制が発足し、現在に至っています。

“真面目のご褒美？”

キノコ・菌類ボランティア　石田多香子

平成24年 2 月 23 日の夜、『企画展示「クラーク博士と札幌の植物」オープンセレモニーは135年前の開校式をイメージした会にしたいので、しかるべく服装で参加頂けると有難いです。』と高橋英樹教授からメールが届いた。

その後、私は四国旅行に出かけた。道後温泉のホテルで絣の着物に袴姿のマドンナの出迎えを受けた。135 年前の女子学生はまさに「これ！」。

幸いなことにクラッシックな雪下駄を求めていたし袴は娘の大学卒業時の物が有る。義母の形見の着物と小物は風呂敷で 135 年前のイメージは決まり！

オープニングの朝である。出勤する夫を送り出すと、娘の袴は 13 センチの裾上げが必要で、大急ぎで取り掛かる。

さて、着付け。袴をはくと着物が裾から出ているではないか！直す時間はなく、仕方なく腰ひもで着物を上げる。風呂敷をかばんに入れ、駐車場に着くと丁度 10 時。大急ぎで「知の交流コーナー」へ雪下駄をカタカタ鳴らしながら走る。

3F企画展示室前に移動する時になってタイムスリップしているのは燕尾服の佐藤弘行さんと私だけと分かる。

湯浅先生が「高橋先生の意向に応えて下さって、喜ばれますよ。」と私を後押しして下さる。この衣装のお陰で「マドンナ」ならぬ、自称「婆マドンナ」がハーバード大学・マサチューセッツ大学の各教授と高橋教授

との記念撮影に納まるという栄に預かった。

筆者の石田さん、佐藤さんとハーバード大学ビュフォード教授とともに

私は「開かれた大学の学びに感謝し、ボランティアの形でお返ししたい」と 2008 年 2 月にボランティア登録し、現在は遠友夜学校とキノコ・菌類ボランティアに所属している。

キノコ・菌類ボランティアでは専門的知識は皆無だが、先人の研究者が残された貴重な学術資料の移し替えは小林先生や先輩の鈴木さんから教わりながら行っている。

埃にまみれた資料の中に宮部金吾先生のお名前を発見した時は大きな感動であった。

自分の手がけていることがこの先どんな研究者が手にされることかと想像しつつ、封筒一枚折るにも「慎重に・丁寧に作業する」ことを心掛け、何事にも真面目にそして楽しんでさせて頂いていることへの此のたびはご褒美のような気がする。

****

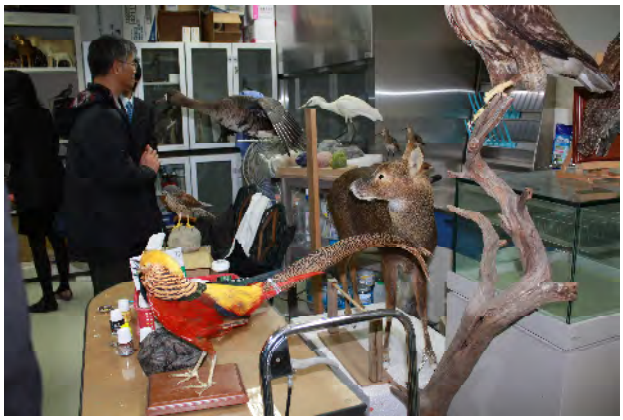
博物館訪問記　“大韓民国国立生物資源館“訪問記

昆虫ボランティア　村山茂樹

去る 3 月 22 日から 25 日にかけまして、先ほど本学総合博物館と協力館の協定を結びました大韓民国環境庁国立生物資源館（NIBR）に派遣されました表敬訪問団に加わり、大韓民国に訪問して参りました。訪問団の構成は、当博物館の津曲館長、昆虫部門の大原教授及び大学院生 2 名、博物館ボランティア 4 名の 8 名です。

22 日は札幌から仁川（インチョン）国際空港さらにソウル市までの旅の疲れをソウル市内のホテルでゆっくりと休め、翌 23 日、仁川の NIBR へと向かいました。午前中は館長同士の挨拶等の式典を経てバックヤードの案内、昼の韓式料亭での昼食会を経て表の展示の案内をしていただきました。

それでは、NIBR を見学した感想を、日本の国立科学博物館などと比較して述べてみたいと思います。まず、日本の国家機関に欠けている資源ナショナリズムに基づいた国家戦略をベースとした資料蒐集体制を構築している、という点は第一に挙げられるべきでしょう。背景とするフィロソフィーを資源ナショナリズムに置くか否かはさて置き、自然史資料の収集に国家戦略が必要である事そのものは言を俟たないでしょう。この戦略性は、標本蒐集と DNA 資料の蒐集の戦略的な組み合わせの大々的な打ち出し、館の職員としての剥製師などテクニシャンの雇用・育成など日本の機関に欠けている側面が強く認められます。



剥製制作室の様子

その一方で、自然史資料を専門的に蓄積するこの大規模館が漸く 2007 年開館という遅さは、国立の公文書館の専門職員数が遥か以前から日本の 10 倍に及び、人文系の国立中央博物館も以前から充実して

いた事を考えると、やはり日本も含めてアジア全般として自然史資料に対する認識は遅れがちであったというのが歴史的な流れであったのかもしれません。それにしても、明治維新以降における日本社会の資料蓄積インフラの後退状況は目を覆うばかりではないでしょうか。少なくとも人文社会系資料に関しては、明治維新以前はむしろ日本の蓄積システムが世界的にみても膨大な歴史的アーカイブズの蓄積を誇ってきたのですが。

また、独島（＝竹島）の生物相のコーナーを設けざるを得ない事情を見ますと、資源ナショナリズムというバックボーンも両歯の剣ともなりかねない、ある種のリスク含みの側面を秘めていると言えるのかもしれません。その一方で、展示全体としては国民へ目配りした社会教育の側面と、世界からの観光客へ目配りした国際観光の側面の両面にバランスをとろうと絶えず努力をしているように見受けられました。

****

着任の挨拶

北大総合博物館講師　江田真毅

2012 年 4 月より考古ボランティアと図書ボランティアの皆さんの館側の窓口となりました、江田真毅（えだまさき）です。昨年度末に退官された天野哲也先生の後任で当館に考古学担当の教員として着任し、考古ボランティアと図書ボランティアについても引継ぎました。どうぞよろしくお願いいたします。

研究分野は考古学ですが、主に動物（とくに鳥）の骨を研究しています。遺跡から出土した動物の骨にどのような種類が含まれているか、どのような解体や加工の痕跡が残されているかなどを調べ、それらの情報から過去の人々の生活を復元する、動物考古学を専門としています。土器や石器といった考古学の花形に比べ、動物の骨は地味な存在です。しかし、土器を使ってどんな動物を調理したのか、石器を使ってどんな動物を狩猟し、解体したのかなど、動物の骨を実際に分析しないと分からないことはたくさんあります。

私は群馬県太田市で生まれ、埼玉県熊谷市で育ちました。大学進学以降、現在まで茨城県つくば市、千葉県流山市、福岡県福岡市、鳥取県米子市と全国を転々としてきました。また大学生のころは、北海道の主に道北・道東地域に発掘調査に訪れていました。しかし、夏以外の季節に北海道を訪れたことはほとんどなかったため、今年 3 月末に札幌に来て、まだ積雪があること、そして 4 月になってもまとまった雪が降ることに大変驚きました。これまで本格的な雪国の暮らしを経験していないので（前任地の米子市は日本海側でありながら年に 2～3 回しかまとまった降雪のない場所でした）、家族ともども今から冬がちょっと心配です。

当館では、標本や図書整理、展示解説などの 13 分野で約 180 名のボランティアの皆さんに活動いただいていると伺っています。日常的な資料の整理や展示の解説は、資料の保管や教育普及といった博物館の社会的な役割を果たす上で大変重要な活動です。また、たくさんの人手と時間のかかる活動でもあります。このような大切な活動の一翼を担っていただくボランティアの皆さんに、より楽しく、より興味を持って活動いただける場を提供できるよう尽力していきます。着任したばかりでまだ分からないことばかりです。皆さんのこれまでの活動について、いろいろと教えていただければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

北大総合博物館准教授　山本順司

皆様初めまして。本年４月に岩石・鉱物・鉱床の担当教員として赴任しました山本順司と申します。この原稿を執筆している時点ではボランティアの皆様とまだあまりお会いできていませんが、このニュースが出版される頃には多くの方と楽しく活動できているのではないかと想像しています。現時点ではまだ博物館の全貌が見えていませんが、岩石の収蔵庫を探検する度にボランティアの皆様のご尽力に驚嘆しています。他の先生方からもボランティアの皆様のご支援については何度も耳にしていますので、私も早く戦力になれるよう頑張りたいと思います。

私はこれから石の担当として務めることになりますが、子供の頃はご多分に漏れず魚や虫捕りに夢中になり、中学校で星にはまり、高校では化石採りに明け暮れ、大学に入って石を学び、博士になってから考古学の勉強を始めました。おそらく隣の芝が気になる質で、良く言えば好奇心旺盛、悪く言えば浮気性なのだと思います。ですから博物館での仕事は私にとって本業を忘れてしまうほど強烈な影響を与えてくれるに違いありませんが、怯むことなく今まで通りいろんな分野に浮気していきたいと思っています。ご迷惑かもしれませんが仲間に入れて戴ければ嬉しいです。

最後に、自己紹介に代えまして私がこれまで力を注いできた研究を少し紹介させて戴きます。私は人類のルーツや地球誕生の謎に迫ることで世の中に貢献できないかとあがいてきました。先述のように子供の頃は古い地層から昆虫や ホ乳類の化石を探しては大昔の環境を空想し、同じ理由から星や考古学にも興味を抱きました。石についても同様で、地球の化石と言える古い時代の岩石から地球の進化過程を推察しています。時には石から地球の奥底の情報が得られる場合もあり、そのような石が持つ深さ情報と時間スケールを組み合わせれば、地球の進化を四次元的に解き明かせるのではないかと考えています。そのために岩石が由来した深さを探る地質圧力計の開発や年代測定を行っています。実際にやっている研究作業は地味ですが、意義はそれなりにあると信じています。

今、悩み始めていますのは、そういった想いを展示で表現する方法についてです。展示方法に正解などないと思いますが、残念な展示にならないよう皆様のお知恵におすがりできればと願っています。どうぞ宜しくお願い致します。

****

編集後記

＊お詫びと訂正

3 月に発行した 24 号の談話会報告で第 22 回談話会と掲載しましたが正しくは第 23 回でありました。お詫びして、訂正いたします。

＊ボランティア室の移設

5 月 23 日よりN314A 室へ移設となりました。以前と同じ 3 階で突き当り左折し北側廊下の中ほど右側です。ご利用下さい。

＊お知らせ

「ボランテイア・ニュース」の総目次を別冊として刊行します。ニュース創刊号(2005 年 2 月)から第 25 号(2012 年 6 月)までの総目次です。本 25 号が発行され次第刊行します。

＊「クラーク博士と札幌の植物」展示解説のご協力感謝します。

ボランティア・ニュース

◆編集・発行
北海道大学総合博物館ボランティアの会
(担当者：星野、沼田、永山、安田，石川)
◆発行日：2012 年　6 月　1 日
◆連絡先
〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目
Tel: 011-706-4706